

奈良 勲(監修), 松尾善美(編)

「理学療法士臨床判断フローチャート」

高橋哲也
(兵庫医療大学教授)

「理学療法士臨床判断フローチャート」が発刊された。「理学療法における臨床判断フローチャート」とせず、「理学療法士臨床判断フローチャート」と、あえて「理学療法士」という固有の医療職種の名を冠したところに編者のこだわりが感じられる。

また、本書ではタイトルにもあるように、障害ごとにフローチャートを用いて理学療法士としての臨床判断を明確にしようとしたところに特徴がある。特に、各論では「運動器疾患・外傷」、「脳・脊髄・神経疾患」、「内部障害・外科術後・集中治療」の3つにわけ、運動器疾患・外傷 15 個、脳・脊髄・神経疾患 12 個、内部障害・外科術後・集中治療 14 個の合計 41 個ものフローチャートが掲載されている。

すべて各分野のエキスパートによる解説付きで、フローチャートの完成度は高いと思われる。コンパクトな本ながら、障害ごとのクリニカルリズニングを助けるためにエキスパートの考えが書き下ろされており、このような本を待ち望んでいた若手の理学療法士も多いのではないだろうか。

本書では単にフローチャートを紹介するにとどまらない。フローチャートに入る前に、障害ごとに「必要な知識」、「評価と治療」、「診療ガイドラインにおける効果への言及」と整然と並べられておりフローチャートの理解を助けている。また、フローチャートの解説の後には疑似症例を提示し、反復学習による理解の定着化が図られており、編者の丁寧な臨床指導のこだわりが感じられる。

総論「臨床経験と臨床判断のインターアクション」には、編者の長年の臨床経験に基づくこれからの理学療法士への想いが、医療の標準化や理学療法士格差の解消の観点から綴られており、内容は重厚である。エビデンス全盛期とはいえ、理学療法は科学性とアート

性の両面を持ち合わせるがゆえに、マンツーマン技術の伝承が極めて重要である。そのため、理学療法のエキスパートになるためには、まずエキスパートの思考過程をまねすることから始めることには異論はない。そのためにもこの本は大きな道標となり得るであろう。

理学療法士は専門職＝プロフェッションである。日本理学療法士協会の新人教育プログラム教本によると、「プロフェッションとは、余人をもって代行し得ない固有の知識と技術を持つ職種であり、(中略)専門職に求められるのは、体系化された知識と科学的な裏付けを持つ技術である。」とされている。

一方、理学療法は時として同じ疾患で同じ障害を持つ患者に対して治療内容が異なることがある。それゆえ「理学療法は体系化された知識と科学的な裏付けを持つ技術が未成熟」と酷評されることも決して少なくない。それら社会からの厳しい評価に対しても、医学的情報と機能評価に基づく標準的視点から作成されたこのようなフローチャートを使用することによって、少なくとも周囲の医療専門家や先輩理学療法士の直観的感觉に左右されず効率のよい均質な理学療法が提供できるものと考えられる。

他方、理学療法士の臨床判断をこれらのフローチャートのようなパターンにはめ込むことに対して異論もあろう。臨床現場は正にケースバイケース、病態や障害像は様々で、臨床判断は多岐に富む。したがって、このフローチャートの枠からはみ出してしまう多様な臨床症状を示す症例も少なくないからである。そうだとしたら、読者には「(このような状態で)なぜ進めていいのか、進めていけないのか」、「なぜこうして進めなければならないのか」、「なぜこの方法がいいのか」といったように、フローチャートの流れを基本として、フローチャートのボックスとボックスの間をリズニングしながら読み進めることを推奨したい。

必ずや編者の「理学療法士」への熱い想いが感じられるものと信じている。

●A5 判・328 頁・2 色刷り
定価 4,830 円(4,600 円+税)
2009 年 文光堂・刊